

# 小学校・中学校の建築と環境の未来性

幸 田 顕

On the Future of the Construction and the Environment  
about an Elementary School and a Lower Secondary School

by

Akira Kōda

## I 序 言

今日、科学の進歩によって引き起されるいろいろな現象は、私達の生活様式を一変させた。確かに科学の進歩は、一方では豊かな生活をもたらし、文化を高めたことも事実である。反面、手離して喜ぶことができない面ももたらした。それは、科学と人間とのかかわり合いが不変であればある程、人間としてどうあらねばならぬか、どう生きたら幸せであるかを考えていかなければならないからである。また、今日の科学の進歩と社会が、どのようなものであるかを知らねばならないのである。

子供の知識は、一昔からみれば、大人が「おやっ」と思うことを知っている。このような現象は、20世紀の教育が組織化されればされる程、この傾向は強くなることだろう。つまり、知識教育は、大変な成果をあげている。しかし、子供の自由な心と感受性や創造力（個性教育）を育てることを忘れては、真の社会的進歩に役立つものとはならないのである。教育における難かさが、ここに存在する。そして、その結果、思考と感情と認識とのバランスを、調和的、創造的に発達させるような教育が、どんなに大切か考えなければならないのである。

私は、教育の問題点を学校教育の環境、つまりは、学校建築という中から、子供と環境の関係を考えて見ることにした。

## II 基礎教育としての造形

### 1 美的環境と情操性

それでは、どうしてこのように大切な創造性を、認識することなく歩んで来たのだろうか。それは、古代から精神主義を求め、生活そのものの精神性が、今日、多くの人々において、創造力がどんなに大切なものであるかを忘れさせてしまったのである。そして、創造力を芸術とのかかわり合いのみに考え、あらゆる場合に、それが存在することを考えなかったのである。創造するということは、人生であり、人生は、創造する。そこに、真の価値性があり、この創造力を育てていく方法が、どんなに大切であるかかみしめ、基本的な原動力として、創造教育にあたらねばならないのである。新しい未来こそ重要なことであり、自己を発見して、未来への可能性を追求することが、どんなに尊いものであるか、亦、私達は、そこに大きな喜びを見出し、希望が存在するのではなからうか。そのためにも21世紀への人間造りに、真剣にとり組まねば、世界の

先進諸国にとり残されてしまうのである。

ここで、もう少し教育環境として、どうあったらよりよい情操性が、養いられるか考えてみたいと思う。

イギリスの美学者である、ハーバート・リードは、教育の目的は「我々の子供達が、肉体的にも精神的にも健康に成長し、感覚的にもはっきり目ざめており、独立した思惟を持ち、自分自らに対して真実で、また、互いに信頼しあって行くようにすることを目標として、自発的な成長のために諸々の力を自由にしてやることにある」と述べている。そのためにも、造形教育をとおして理想的な全人を育成することが、同時に、平和的世界の礎石となると言っている。

すなわち、既成の材料を与え、伝統的な技術を教えたり、訓練により上達した技術など、今までの実利的教育というものからの脱皮をはからねば、成長しきっていない自由な子供の心を閉ざすことにもなって来るわけである。伝統というものは、長い歴史の中で、消化され受け継がれて来た結晶に相違はないが、無限に広がる子供の世界には、無用である。子供には、私達が想像もつかない幻想的な世界があり、その心を正しく伸ばしてやるのが大切になってくる。多くの抑圧や、束縛があり、それから解放していかねばならぬのである。そこに子供の知覚や感覚、感情の能力を子供達が生活している環境に、調和させていくことが、大切になって来る。子供の成長発達、発育と環境、自発性、自立性、創造的能力などの開発、そのためにも、子供が何を考えて、どのようにとらえようとしているかなど、生活理念と社会理念を研究して、本当に子供にとってよい環境構成を考えていかねばならない。自己表現を自由に、より個性的に見定め、生き生きした人間教育が、必要なのである。

バウハウスにおける構成基礎教育の生みの親である。ヨハネス・イツェンは、教育の目的は、古い世代の経験と知識によって、人生の困難を乗り越えられるよう、幼き者を助けていくことであり、これによって精神的、肉体的にその能力を調和的に発達させ、文化を受け継ぎ創造的能力を発揮し、社会に貢献しうるよう導くことであると述べているように、教育方法が、一つのヒントとなって、想像的な創造力を育成し、斬新な造形表現のできる創造性の豊かな人間を育成することであった。そのためにも、美的教養の育成ばかりでなく、「用と美の一致」を考えたのである。今日「創造」という言葉は多く目につくが、本来創造ということには、真理を探究していくという使命のようなものがあつた。そして、道徳と美学と真理の把握が、最も美しい人間としてのパーソナリティに富み、成長していったのである。それは、情操としての価値性の認識であり、こうした真、善、美の高い価値に対する感情を育成し、豊かに正しい理性意志に基づいた行動が、活動の基本となるのである。

また、子供達の情操を養うということは、豊かな心の成長、人とか、自然の美しさや、価値について豊かに反応できる心や、考えを育成することでもあり、そこには、当然人間として、情緒豊かなものが芽生え出ることだろう。

このような目的にそつた教育こそ、生活の創造であり、創造的表現であるのだ。すでに述べたように子供は、自由な活動の中から（自然的活動）年と共に理知的活動に入っていくのであるが、そのためにもより一層画一性というものによって、束縛してはいけないのである。このことは、一朝一夕にしてできることではないが、私達は、この現実の姿をより直視して、画一性もっている問題点を考えていかねばならないのである。

ここで、もう少し掘り下げて、それぞれの年齢的な特質を述べ、どのような発達段階に適應させていかなければならないか考えてみたい。

### 1. 3才—7才

幼児期から小学校低学年頃の年齢であるが、自然的な発達の中で、自由な創造性を求め、だん

だん理知的世界に入っていくのである。子供にとって創造することは、対象の発見と理解の手段であり、自から行為することによって、感覚的にももの姿をかみしめるのである。そうして、子供のもっている理想から次第に進歩して、理知の世界に入るのである。子供は考え、自身を確かめ、どれが正しいか、価値あるものかを知って、より科学的に分析していこうと努力するのである。そして、理想の世界が、自身に身近かになった時、感動はより一層クライマックスに達するのである。しかし、このような年齢には、目的に対する行為がかならずしも完成するとは考えられない場合も目につくはずであるから、失敗に対しても、単に外的条件をいかに合理的に処理したらよいか、そのつど考えさせるような環境を、ごく自然的に造ってやるようにしなければならない。そのためにも、学校環境（教育環境）や、社会環境の役割が、大切な要素になるのである。

## 2. 7才—14才

この頃は、自然的創造からだんだん理知的創造に入る年齢であるから、自我の認識によって、物事に対する思索は、より深まる頃である。人生に対する考え方、社会に対する考え方も自から追求するようにもなり、理想もはっきりしてくる。しかし、進歩と停滞をくり返ししながら、一層完結に近づこうと最大の努力をする。失敗や停滞を上手にのりこえていった時、自己に対する自信や、創造に対しての自信がより強調されてくる。

また、この時期に一時的停滞に対して、なんら外的、内的要因をとりのぞく努力をおこたった時に生ずる結果は、充分注意し指導していかねばならない。そのためにも系統的組織化によって指導していかねばならないのである。よく「適正」という言葉を聞くが、人には、それぞれの職業、人生に対しての適材適所という性格のものが、存在するはずである。しかし、現状において、これを子供達の全体に判断することができない。それだけのものを判定する科学的材料に乏しいのが事実なのである。それは、今日における教育環境の矛盾につき当るが、教育という抽象の世界に、少しでも正しい判断をする今後の研究に期待したいと思うが、とりあえず、しなければならないことは、やはり、環境造りによる科学的方法論をより明確にして、対処していかねばならないと思うのである。

以上述べて来たことは、まず環境を設定するためには、子供達の性格をより分析して、科学的知識の中で、どんな教育環境を造ることが最も望ましいか、考えていきたいと思うのである。

## Ⅲ 学校建築と環境構想

### 1 建築と彫刻・絵画とのかかわり合い

つぎに建築と芸術とのかかわり合いについて、述べてみたいと思う。

この関係は、古代からの歴史的事実に基づいた結果と（古代建築）現代建築とのそれぞれ成立の観点からの相違が見られると思うのである。古代建築における彫刻、絵画との結びつきは、建築総合の役割りを十分に生かしきっているが、現代建築には、かならずしも生かしきっていない面がある。古代建築は、あらゆる観点で、人間総合間の結びつきをもって総合芸術にしてきたのである。

ギリシャのパルテノン神殿に見られる列柱の威容さは、心をうたれる。その横のエレクテイオンの東柱廊では、優雅な六人のコレーが、梁を支えている。梁には、無数のきざみを入れて一層美しい輝きを呈しているのである。この神殿の造営事業は、約15年の歳月を経て完成した。また、フランスのノートルダム寺院（パリ大聖堂）に見られる輪郭の清澄さ、飾りつけの力強い簡素さ、全体の調和は、誰もが認めるところだと思ふ。正面には、28の彫像が並び、内部は天井が

高く、ステンドグラスの色彩を通して、薄暗い堂内に神秘感を漂わせている。ゴシック建築の代表的なものである。

このように、古代、中世を問わず各分野の協調性と専門化は、造形芸術において建築との一体化の中で、生きつづけてきたのである。それだけに、人々の生活の中にはうるおいがあり、文化都市として一層強調されたことであろう。

では、現代の建築に総合が全く見られないかといふとかならずしもそうではないのである。特に意識化の中で、芸術家は、お互いにポイントをついているものも増しているのは、よいことである。それでは、どうして総合芸術としての建築が、かならずしも総合でなかったのか。これは、芸術家自身にも大きな責任があるようにも思われる。かつて、それぞれの芸術家は、システム化された中で自己を確立してきたが、今日では、一人の芸術家は、単に、作品のための芸術的要素が強かった。芸術至上主義として盛えた時期を、よき時代であるなどと公言する芸術家は、その代表的人であろう。

時代の変化は、人間環境を大きく変化させ、技術的行為をより明確にさせる結果となり、芸術的行為に移行していく方向をたどるのである。それから技術が、普遍的な形で生活の中に行き渡るようになり、生活そのものの手段となって、人間が、かつて経験したことのない現象を見せてくれるようになる。そうなると環境に同化し、順応し機械的現実の他には、何も存在しなくなるのである。一般大衆の美的価値が創造され認識されていく中で、芸術への道も大きく変化をとげて来た。一方では、建築の美的価値はより一層機能主義という形態を創造し、画一的な形式主義は、表面的になってきたのである。これが、本来の姿から分離し、遊離して環境そのものも固定化した様式になって、今まで共通の立場から出発してきた建築、彫刻、絵画が共通の表現を生み出すことが、少なくなってきた。そして、絵画、彫刻が、単独で存在し展覧会形式という小宇宙の中で、芸術品になってきた。つまり、作品のための作品が生まれ、芸術のための芸術品が創造され、社会的必然性から、精神主義へと変化してきた。このようになると、大衆との対話や接触がなくなり、作家の無機的要素から有機的要素への創造となり、より主観的なものとなり、個性への強調が求められるのである。次元の違いや、拡がりや動きも暗示し、静的環境から動的環境への変化であり、彫刻は、ヴォリュームのコンポジションから造形的抽象形態へ、そして、構成主義へとつくられながら、空間へと拡大していく。亦、モビールなど動くことによって、二次元や三次元の世界を造り出し、音や映像を表現することにより、四次元への環境を設定し、人間と彫刻、絵画との抽象化された対応を、断ちきって来たのである。

対応するということは、物と物の対応、人間と物との対応、空間と物との対応、ある材質と別の材質との対応、これらの相関関係によって、最も合理的な対応が存在する。しかし、いつもそうになると、誰れが言明できるだろうか。刻々と世界は変化するし、環境は収縮する。人間の精神は、さまざまな経験によって、どうにでも変わることもあるのである。しかし、いかなる変異によっても、私達は、新しい世界を夢み歩むのである。その環境と人間との関係によって、発生するバランスこそ、真の対応になるものであろう。

建築と彫刻、絵画がそれぞれどのような形で協調していったらよいであろうかという、新たな芸術間上の問題がある。それは、共存するときどうしても形態上のバランスや、環境的秩序のことがあると思うのである。これは、総合芸術として共存する時、美的構成の面から考えていかねばならない。

かつて古代から中世にかけての建築、彫刻、絵画が、それぞれの立場からの役割りが、大変強調されていたことは、既にわかっていることであるが、彫刻、絵画が建築に対して、より従属し

ていった時、それぞれの創造者のイメージは弱くなり、総合芸術としての意味はなくなる。単なるデコレーション的要素でなく、より高次元の主張こそ大切なのである。建築は、構造学上どうしても切り離せないものも多く存在するであろう。空間と空間の結びつきによって、より重心が重要な意味をもっても来るであろう。

このように考え追求していくと、本来建築も、絵画も、彫刻もそれぞれ社会的意味の妥協は、ありえないと思うし、創造者として、芸術家の個性として、一つの実現にそれぞれの立場で考えていかねばならないことであろう。今日の科学が、私達の社会を多彩に変化させたが、それは、それぞれの専門分野における特別な意識の高揚が造りあげた特権意識であるから、本来の姿に戻って、より専門制を強調するための要素として、科学的存在を認め合うことの方が、より意義が深いのかも知れない。創造的芸術家として、勇気をもって、真の創造者になるべく努力をしなければならぬし、それだけの覚悟は必要でもある。

#### Ⅳ 小学校・中学校建築への創造

今まで述べてきたことを基礎として、実際に学校建築と環境は、どうあったら望ましい教育がなされるか考えてみるならば、小学校、中学校が求めている全体像は、基礎的な人格形成者として、個人の確立である。亦、小学校、中学校時代に大切な情操の問題点も考えねばならない。この問題を、どのようにカバーしていかねばならないか。4～5教科による重点主義をなくしていかねばならぬことはいまでもないが、もう一つは、環境による再構成によって、より高度な情操教育や、精神性を追求していかねばならないと考えるのである。日本の環境は、諸外国の先進国と比較した時、いろいろとあげられる。

私は、学校建築とまわりの空間構成が、もっと個性的性格の中で、建築と芸術の結びつきを、ふんだんにとり入れて行った時、子供の心は、未来にむかって動きやすくなることを信ずるのである。そして、建築とそれをとりまく造園設計が、総合的に形造られた時、よりその真価をはきし出すのではなからうか。

小、中学校における1学級の児童数は、45名までである。この数字は、決して理想的な数ではないが、あまり多くても、少なくとも困るのである。それは、限られた設備、教師の時間的な問題から見ても大変であるから、理想的な1学級数は、20～30名くらいである。全校数が、小学校は、12～18学級以下となっている数は、中規模校ということになり、現在マンモス学校をかかえている所も、かなり多くあるようで、考えていかねばならないのである。

小学校と中学校のカリキュラムは多少の違いはあるが、基本的には同じである。普通教室の他、図工室、音楽室、理科室、家庭科室、体育館、図書館などの特別教室になる。その他、教員室、保健室、生徒会室、給食室、放送室、校長室、トイレ、用務員室、クラブ室、などを考えていかねばならない。

小学校における普通教室は、最も子供達が、長時間の学習形態をとる所となる。中学校の場合は、普通教室、特別教室の学習時間は、半々くらいであるから、それぞれの教室の使用度は平均されているように思える。そして、7才～12才くらいまでの年齢の開きがある。これは、低学年、高学年によって考えられるが、特に、低学年における子供の学習形態は、教師に大変依存的であり、自からの積極的行動には、かならずしも発展していないものである。そのためにも、内部的行動と外部的行動の融合が、行なわれやすい環境を造ってやらねばならぬ。そのために、子供が、どの程度一貫性をもてるか、独立心をもてるか、行動により積極的にとりくめるかなどの配慮が必要である。また、身体的には、かならずしも高学年とは違うのであるから、行動、環境

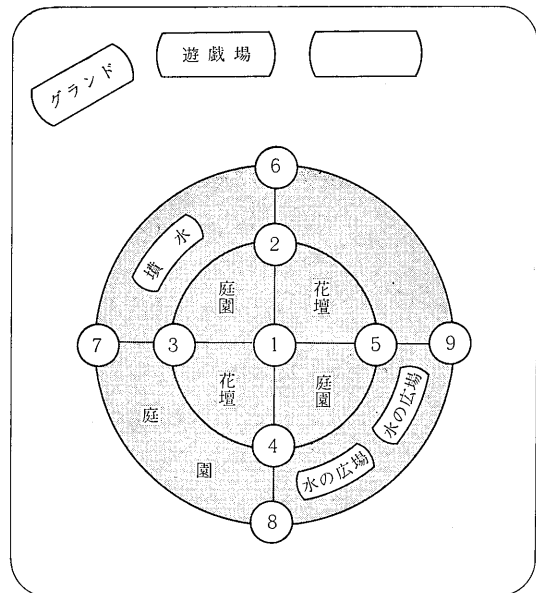
による疲労もできるだけとのぞいてやらねばならない。そして、教師と子供との距離も近くもならず、遠くもならず、むしろ教師が、安全教育のためにも、目が届く程度のことは望ましいと思う。また、各普通教室を独立して、教室と教室の間は、廊下で結びつけるということもよい。これは、他学年からの直接の干渉をやわらげたり、隣の教室からの音が聞えることが、学習に大きく影響するのを防いだり、個性色豊かな部屋の構成が可能である。こうした独立の教室であっても、クラブ活動とか、放課後の遊戯によって、共有の広場もできるから、各人の接触はあり、別に心配はないはずである。そして、それぞれ部屋の内部構成は、可能な限り全部個性色あふれるようにする。例えば、レリーフによって壁面構造にしたり、色彩調節は、それぞれ各部屋の役割りの違いによって工夫をして、明かるい配色構成にしたい。しかし、ばらばらの配色でなく、一貫した考え方による色彩設計を、基礎に行なわれなければならぬ。低学年は、高学年と違った行動にまだ限りがあり、細かな動きがあったり、部屋の構成、色彩なども積極的なものを選択していくことがよい。共有の場には、全体性の観点から年齢差による抵抗をやわらげたり、意識を少なくするような配置配合が、必要になる。

つぎに、建築と庭園の関係であるが、あくまでも空間にゆとりのある構成が、必要であるし、庭園は、和式庭園でなく洋式庭園をとることによって、より立体感を強める。(別図を参考) 建築と建築、庭園と建築、庭園と庭園の間は、子供達のイメージをより強く表現できるように、抽象形態の造形物を配置する。春夏秋冬の花壇を造ったり、噴水を利用したりするのもよい。廊下は、絵画や、モザイクで壮大な壁面を造ったりして、少しでも、子供の情緒を健全に育てるようにしたいと思う。普通教室、特別教室など各部の役割があるから、そのポイントをよく知って、一貫した色彩設計をすることが望ましい。低学年と高学年の特質は、低学年は、行動形態に積極性をもたらすように工夫し、活動的色彩を配置したり、高学年には、勇気と情熱によって、物事を冷静に行なっていく判断力を養い、なえる色彩の選択が、大切であると思う。また、共有の場には、学年による違いを少しでもなくするにしたり、全児童の行動が、集中する空間など情操を高められるように、いろいろな美による配置配合をするとよい。

学校建築による子供への情緒は、学習を通して心の成長をうながしたりする基本的、且、共有の場であるから、可能な限り、便利な環境構成をしなければならない。

## V 結 語

今まで述べて来たことは、現実化していくために大変な努力が必要になってくる。それは、教育の原点にたつて、



1 教職員室 2～5 普通教室 6～9 特別教室、体育館、円、廊下

- 普通教室、特別教室の数は実状に即して増減する。
- 各教室は、一階を理想とするが、事情によっては各二階も可
- どここの教室からも、環境を見わたせる空間構成(立体構成)を理想とする。

未来の人造りを、積極的に行なわなければ実現しない。そのためにも、いろいろな方向から研究し、科学的な実証に基づいた結論を求めるようにしなければならない。つまり、人造りという困難さが、そこにあるのである。また、これを実現していくために膨大な経費が必要になる。

それは、今後発展する社会において、子供達の教育はどうあらねばならぬかという原点にたつて、多くの認識と理解を待つより仕方がないのかも知れない。そして、世界の中の日本人として、広い視野と活力に満ちた創造がなされる時、真の教育環境が建立されるのではなからうか。

## 参 考 文 献

- 1) 児童画の心理と教育, 霜田静志, 金子書房
- 2) 建築心理入門, 小林重順, 彰国社刊
- 3) 図画工作教材研究, 小原国芳, 玉川大学
- 4) 現実と創造, 丹下健三, 美術出版
- 5) 教育小六法, 兼子仁, 学陽書房